


第9回(2020年)三島海雲学術賞の決定


公益財団法人 三島海雲記念財団(理事長 今関博)は、第9回三島海雲学術賞の受賞者2名を決定いたしましたので、お知らせいたします。本賞は、自然科学及び人文科学分野において、傑出した研究業績を有する優れた若手研究者(45歳未満)を顕彰する賞です。

受賞者には賞状と副賞200万円が贈られます。

【自然科学部門】(食の科学)

	(受賞者) 藤村 由紀 (ふじむら よしのり)氏 九州大学大学院 農学研究院 生命機能科学部門 准教授
	福岡県出身 1975年12月生まれ 44才
(受賞研究要旨) 「食品ポリフェノールの生体感知機構と機能性増強技術に関する研究」 生体が緑茶ポリフェノールを感知して機能性を発現するしくみを解明した。すなわち、「ポリフェノール感知受容体」としての67LRを初めて発見した。また、ポリフェノールの体内分布を可視化できる「質量分析イメージング法」の開発にも成功した。さらに、「メタボリック・プロファイリング法」により食品中の多種成分の機能性寄与度の評価を可能にした。これらにより、緑茶カテキンの生理作用をセンシングから機能発現まで明らかにするとともに、機能性を増強する技術にも応用できることを示した。	

【自然科学部門】(食の科学)

	(受賞者) 柚木 克之 (ゆぎ かつゆき)氏 理化学研究所 生命医科学研究センター 統合細胞システム研究チーム チームリーダー
	東京都出身 1977年2月生まれ 43才
(受賞研究要旨) 「統合オミクス解析による代謝制御機構のシステム解析技術開発」 代謝の恒常性は複数のオミクス階層にまたがるネットワークにより実現されている。複数のオミクスデータを統合してこのネットワークを再構築する「トランスオミクス解析」の手法を確立した。この手法を用いて階層縦断的な新規の解糖系調節経路を発見し、また脂肪細胞における代謝プライミング現象を見出した。さらにインスリンが空腹時と摂食時で異なる調節経路を使い分けていることを明らかにした。本技術は新規な方法論として、哺乳類の代謝恒常性とどまらず、代謝工学や発酵工学などの分野でも応用が始まっている。	

(年齢、所属機関・役職は2020年7月10日現在)

なお、今年度は人文科学部門(アジア地域の歴史・人文科学)の受賞はございませんでした。

「カルピス」生みの親 三島海雲



1878年(明治11年)大阪府いまの箕面市の寺に生まれた三島海雲は西本願寺文学寮そして仏教大学に学び、24歳の時、青雲の志を抱いて中国大陸に渡ります。やがて仕事で訪れた内モンゴルの地で、遊牧民の活力源と言われる酸乳(発酵乳)に出会いました。

1915年(大正4年)に帰国後、自らの内モンゴルでの健康体験をもとに、乳酸菌を活用した食品の事業化に取り組み、試行錯誤を繰り返したのち1919年(大正8年)7月7日七夕の日に、日本初の乳酸菌飲料「カルピス」の発売に漕ぎつけます。「カル」はカルシウム、「ピス」はおいしさを表すサンスクリット語から自身が命名。水玉のデザインは天の川、天体の縮図をかたどったものです。

「カルピス」を日本を代表する飲み物に育て、長く経営の第一線にあった三島海雲でしたが、幾多の試練を乗り越えることができたのは、「私欲を忘れ公益に資する」「国利民福」に代表される独自の世界観と信念だったとも言えます。1962年(昭和37年)84歳のときに、「私が今日あるのは、先輩、友人、知己、さらには国民大衆の方々の惜しみないご声援によるところのものであると思った。したがって私の得られた財物は、ひとり三島海雲の私するものはない。あげて社会にお返しすべきものである。そして、お返しする方法として、財団を設立することが望ましい。」と考え、全私財を投じ三島海雲記念財団を設立いたしました。

<本件に関するお問合せ先>

公益財団法人 三島海雲記念財団

事務局 山田 誠、唐木田 陽一

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 1-6-10 ジラッフアビル

Tel:03(5422)9898

URL:<https://www.mishima-kaiun.or.jp>

